

狭山事件題材の映画 長岡で上映会

石川さんら呼び掛け

1963年に埼玉県狭山市で女子高生が殺害された「狭山事件」で無期懲役判決を受け、無実を訴えている石川一雄さん(74)の日常を映したドキュメンタリー映画「SAYAMA みえない手錠をはずすまで」が16日、長岡市中央図書館(長岡市学校町)で上映された。石川さんを支援しようと約100人が来場、石川さんらが舞台あいさつし、再審開始に向けた世論の盛り上がりへ支援を呼び掛けた。

試写会は県上映実行委 獄。部落差別による冤罪が主催。県内での上映だと訴えている。舞台では初めてで、年内には、石川さんが「私は24歳まできちんと読み書きができなかった。自分の社会的無知が自分を窮地

石川さんは94年に仮出 映画は3年かけて製作

力を世論へ再審へ

理不尽な事件 知ってほしい

金監督

狭山事件から50年、映画は何を映し出すか。

長岡市で16日上映された「SAYAMA みえない手錠をはずすまで」。

「殺人犯」とされた石川一雄さんの日常を追った監督の金聖雄さん(50)は「真つすくで誠実な石川さんと一緒に過ごして、無実だということをあら

上映会に集まった観衆に再審への支援を呼び掛けた、右から石川一雄さん、早智子さん、金聖雄監督 16日、長岡市

ためて感じた」と言う。石川さんの支援者は「映画によって狭山事件を多くの人に知ってほしい」と願っている。

金監督は言う。「今も殺人犯のレッテルを張られた石川さんはどんな人だろうと思ったことが撮影のきっかけ。事件の理不尽さ、被差別部落出身という石川さんの経験をまとめたと思った」

映画の中で石川さんは「無罪になったら広いケニアに行ってみよう」「死んだら骨を海にまいてほしい」と話している。金監督は「刑務所に閉じ込められたことや、今も仮出獄中という見えない罫いが石川さん

された。石川さんの妻の早智子さんが石川さんの散髪をする日常の風景とともに、弁護士が裁判所、検察官と話し合う「3者協議」の内容を報告する場面などが撮影されている。

映画を鑑賞した上越市の会社員男性(56)は「石川さん夫妻の人の柄を感じた。早い再審開始を願います」と話した。

佐渡市では「トキのむら元気館」で石川さん夫妻も参加して25日午後6時半から上映されるほか、上越市でも来月に計画されている。

の中にはあるのでしょう」と察する。

撮影を通して人生、夫婦、正義について考えたという金監督。「石川さん夫妻がどんな思いで生きていたのかをつづりたかった。再審へのムーブメントをつくれれば」と語る。

また、県内各地での上映を目指す県上映実行委の小山正明共同代表(57)は「事件解決は、石川さんの「見えない手錠」を外すだけでなく、部落解放運動の前進、司法改革にもつながる」と期待。「事件を解決するために各地で世論が高まること」が大切」と呼び掛けている。